

1997/4 NO.23

oaca

社団法人日本建築美術工芸協会



## CONTENTS

---

'96北九州シンポジウム-「開発保全」	…1
'96北九州シンポジウム参加して	…4
AACA賞	…6
アピアランス(会員作品紹介)	…9
時代の華一輪	
奥田 小由女	…10
三木 多間	…11
aacaトーク	
河合 紀	…12
橋本 奈良二	…13
■表紙写真	
「門司港」	

# '96北九州シンポジウム——「開発と保全」

日時 平成8年10月31日(木)

午後1時30分~5時

場所 北九州国際会議場メインホール

パネルディスカッション

コーディネーター：内井 昭蔵

パネラー：黒川 紀章

宮本 忠長

村松貞次郎

出口 隆



## あいさつ



福岡県知事  
麻生 渡 氏



北九州市長  
末吉 興一 氏



日本建築美術工芸協会会長  
芦原 義信

## 開会あいさつ

日本建築美術工芸協会は、わが国における建築家や美術家、工芸家など芸術家が集まって、いろいろディスカッションしながらわが国の都市や景観を少しでもよくしていこうという団体として、毎年一回、このようなシンポジウムを開催しています。きょうは、「開発と保全」というテーマで、みなさんたいへん関心をもっていると思います。このシンポジウムから何か一つ、これかなというヒントを得ていただければ本当に幸いです。

## 記念講演



文化庁次長  
小野 元之 氏

これまでの、とにかく安いモノを大量につくって売り、経済的な繁栄を遂げてきました。日本経済は右肩上がりの成長を続けてきたわけです。極端に言うと、効率第一主義、生産第一主義でやってきた。しかし、東南アジアでは、安い労働力で非常に精巧な精密機械をつくることができるようになってきました。すると、日本のように、高い土地代と賃金の国が同じモノをつくって同じ土俵で勝負することは、多分できない。

他方、日本人の生活の中には、さまざまな形で、根の深い文化財としての伝統文化が脈々と流れています。この伝統文化が、効率第一主義、生産第一主義の中で若干影が薄くなりかけていました。しかし、バブルが崩壊し、右肩上がりの成長が難しい時代になって、本物志向で伝統や文化を大事にしていくという方向が間違いなく出てきていると思います。

そして、そういう日本人の文化的伝統を大事にしていく風土が、文化の振興を支える大きな柱になると思います。

さらに、いま、生産拠点を人件費や土地代の安い海外に移すという産業の空洞化が懸念されています。空洞化は日本の中に生産基盤がなくなるわけですから、雇用、労働事情が大きく変わってきます。しかも、日本は急速に高齢化が進んでいます。一方で、技術力は海外に移転してしまう。そうしたとき、日本の製品がアジアの国々と競走して勝つには、正確に動く、きちんと動くというだけでなく、プラス・アルファが必要になってくるわけです。

この三点から、文化庁としては、日本は「文化立国」を目指さなければならないと考えているわけです。それで、文化庁では文化立国21プランを掲げていますが、そ

の中の一つの柱は文化への投資は未来への投資だということです。一つの製品をとっても、それが将来の日本を支えていくために、いま、文化に投資しなければならないのです。文化への投資は、日本の存立基盤として文化の仕事をしなければならないということなのです。さらに、文化の質は、一人ひとりの人間にとっては生きていく証でもある。

ところが、諸外国と比べると、わが国の文化予算は非常に少ない。これを何とか増やそうということで、財政当局とやりあっているところです。文化への投資は、単に芸術文化のレベルを高めるということではないのです。経済発展の牽引力になる新しい雇用や需要を産むという側面もあるのです。

これだけ成熟した社会ですから、国がお金を注ぎ込むのであれば、その効果として、多くの人びとが生きがい、幸せを実感できる社会にしていかなければなりません。

## 従来の開発ではなく

調和ある方向を



建築家  
aaca副会長  
内井 昭蔵

昨年は阪神・淡路大災害がありました。その復旧も軌道に乗ったかのように見えますが、大きな傷は一朝一夕には回復しないのではないかと思います。問題は、日本の住宅文化を育てていた場であり西宮とか芦屋とか阪神の住宅の多くが壊滅的な被害を受けたことです。これらの復旧はほとんど絶望的ではないかと言われています。

これまでの財産つまり伝統を育ててまいりました住宅地の破壊というのは、ライフラ

インのように一朝一夕にすぐ復旧することはできないのであります。これは関西住宅文化がここで途絶えてしまうということでもあると思います。歴史とか文化が集積した住宅地の復興というのは並み大抵ではないと思います。いかに伝統的な生活の場というのが需要であるかということはこの災害が物語っているように思います。

また、文化庁指定の重要文化財や県、市指定のものはある程度補助金が出まして、比較的スムーズに復旧ができたと思いますが、個人所有の建物につきましてはなかなか難しいのが現状です。

しかし普通の住宅のなんでもない住宅、あるいは建造物でも長い歴史の中で市民に見守られて生きてきたものはそれなりの価値があると思います。保存に私は差別はないのではないかと思います。この災害を見ておりまして私たちは非常に多くのものを学んできたように思います。

開発ブームがバブル崩壊で下火になったとはいえ、私たちが生活していくうえでは開発もまた必要であります。問題は、従来の開発ではなくて、文化の保存とか地球環境的視野から調和ある方向を生み出さねばならないということではないでしょうか。

ここ北九州で開発と保存の問題を論じようとしたしたのは北九州市が行った門司港周辺のレトロ事業に注目したからです。この事業につきましては、きょうご出席の出口隆助役から詳しいお話が伺えると思いますが、ようやく全国で個性的な街づくりや町並み形成の事例が多く見られるようになりました。これは大変喜ばしいことです。それらはいずれもそれぞれの個性を生かした開発と保全の調和をとってきたものと言えると思います。

## レトロ—文化的遺産

生かした街づくりを



北九州市助役  
出口 隆 氏

世界資本主義の今日では文化庁からお墨つきをいただける文化財の指定があった場合は別ですが、そうでない場合は開発当事者はなかなか文化的な遺産まで顧みることは困難ではないかと思えます。なにしろ文化的遺産についての評価は個人個人大変差がありますし、受け取り方も多様です。

最終的には地域の住民がその文化的遺産についてどのような存在意義を感じているのかというところが問題になってくるわけです。地域住民のコンセンサスあるいは一致した支持があれば、公共の開発であれ民間の開発であれ、文化的遺産の保全はゆくり前進するであろうと思えます。

門司港は、現在でも今世紀初頭の近代建築が20棟以上も残存しておりますが、昭和60年になって、旧門鉄クラブ—いま三井クラブと言っています—の解体が国鉄から知らされました。引き続いて62年に旧商船三井ビルの解体が知らされました。商船のビルは解体して駐車場にするというシヨッキングな話でした。なんとかして残せないものかと、いろいろ議論をいたしました。どうしようもなかったというのが当時の現状です。

折りよく、ふるさと創生事業が提案され、地方自治体で手を挙げるならばお金をつけるという話がありました。私もさっそく案を作りまして、国のほうにお願いをいたしました。それでOKをいただきまして、初めてここでレトロというものをキーワードにした街づくりをしようということになりました。

先行いたしておりました港湾の整備計画ともドッキングをいたしまして、建物を保存するという事業と港湾の整備事業、そして港湾の背後の整備事業、これらを一体とした整備計画を策定いたしました。街づくりのコンセプトといたしましては地域の自然環境を大切にしながら明治、大正の文化を育てていこう、継承していこう。そしてそれを街づくりにつなげていこう—こういったコンセプトを固めたわけです。

平成元年ごろからスタートしまして、昨年の三月までにはほぼ古い建物の保全等が終

了いたしました。建物と周辺の事業につきましては各省庁のご協力をいただき、事業を組合せしまして、このようなところまで進んだわけです。

これからの街づくりとしては、このような文化的遺産を生かした街づくりに着手していかなければならないと考えています。

## 開発と保全は

いつも同じ場で暮らしている



建築家  
宮本 忠長 氏

きょういただきましたテーマの開発と保全というのは、さきほども黒川紀章先生と控え室でお話をしたところですが、大きな隊列あるいは小さな隊列あるいはアイデアのような関係、いろんな関係の中であるものだと思います。

私は地方で仕事をしていまして、とくにそういったことが顕著に仕事の上にも目に見えてくるものですから、開発と保全あるいは保存というようなものは、いつも同居しているというか、同じ場で暮らしているような感じを実感しています。例えばここまでが開発で、ここからこっちは保全ですというようなことは実際日常生活の中でなかなかはっきりとし切れないものだと思います。

また、私は修景という言葉を使いますが、風景、景観や環境をお互い緩やかな関係をつくっていくというのが修景ではないかと思っています。

内井先生から小布施町の町並み保存の話がありましたが、約20年かけて街をこれだけ整備しました。言うなれば生活環境の整備です。そして空地に一つの目的を与えて、それぞれが公のために何らかの働きをするということで、例えば広場とか駐車場を持つ広場とか普通の道とか、建物と建物との間の空間は建物と建物を結ぶ役割を果たすと同時に、間の空間がむしろ主役ではないかと考えました。例えばゲシュタル

ト心理学で言いますと、図と地の関係があります。

たまたま小布施がスタートしたころ、芦原義信先生の『街並みの美学』という本が出版されまして、そのころ集落とか通りとか町並みということ自体が大変珍しい新鮮な感覚がありました。同時に町並みの美学ということも大変なショックを受けたわけです。それで、建物と建物の間の空気が脇役ではなくて、あるときにはそれが逆転して主役になるというような考えを持って間の空間を考えたわけです。

開発と保存はいつも背中合わせというか、しょっちゅう重なっているか横に並んでいるか、いつも同じ場所にいるのかもかもしれません。私はそういったゆるやかな関係で修景というようなことを考えております。

## 時代の証言者であれば

後世は残そうと考える



建築家  
黒川 紀章 氏

これからの景観ということを考えるときに、都市というのはどういうふうにつくられてきたのかということを考えてみるのが非常に重要ではないかと思っています。都市は、時代時代の最先端の集積である場合にのみ残っていくものであり、時代時代の証言者であれば、後世の人びとは残そうと考えるのです。できた当時に批判された奈良国立博物館（旧帝国奈良博物館）、琵琶湖疏水、エッフェル塔などが現在どういう評価をされているかを見たらえれば、理解できると思います。

いま、私は門司港で31階建て超高層マンションの設計を担当しています。超高層にしたのは、低層にすると屏風のようになってしまう、門司地区の後ろ側にある風景が完全に隠れてしまうためです。

しかも、レトロ地区に残っている建物は、スケールが小さい。小さいものに対して、とくに足周りの大きさというのはとても大

事になってきます。高層にすることで建物が細くなり足周りの建物の大きさはレトロ地区に現在残っている小さな建物と同じようなスケールになって、歩道を歩いているときの快適さは壊されなくて済みます。

一方、柱と梁がそのままデザインになっているシンプルなデザインを考えました。レトロ地区の建物というのは非常に装飾性の高い建物ですから、その主役を目立たせるため、背景としてある建物は出来るだけシンプルなものをということと、現代というものには装飾の時代ではないと思うからです。

この建物が将来平成の時代を物語っている建物として認めていただけるかどうかは、現代の産業の水準、技術の水準をこの建物が表現することだと思います。ですから日本でも実験的にいくつか出ていますが、鉄骨を使わないで鉄筋コンクリートで31階建ての建物をつくるというのは最先端の技術です。最近開発された技術です。

色はプレキャストコンクリートに焼き付けた黒い利休ネズミ色と昔から呼んでいるもので、それは日本の色だという気持ちがあります。もう一つは黒子だという気持ちがあります。主役はレトロである。その背景に静かな形でしかも黒子として控えています。そういう謙虚な気持ちを色でも表現しました。

## 矛盾しない第一法則

残すのではなく造る



建築史家  
村松 貞次郎 氏

「開発と保存」の難しさが指摘されていますが、一言でいうと、開発と保存は決して矛盾するものでもないし、対立するものでもないと考えています。矛盾するのは、うまくない開発を強行しようとするからです。

開発と保存が矛盾しないための第一の法則は「残すのではなく、つくる」ということです。つまり、ファサードを保存し、中は近代的にする。あるいは、たとえば京都をつ

くるために先人が残したデザイン要素を使う。これが「残すのではなく、つくる」ということです。

また、琵琶湖疏水など、かつて景観を大破壊したものが、いまは、「守れ」「保存したい」ということになっている。すると、景観条例なんかをつくらずに好き勝手やらせておいても、後世には「守れ」「保存したい」となるかもしれない。しかし、これはやはり無責任であり、何十年、何百年後に、すごいものをつくってくれたと評価してもらえるだけのものをつくらなければなりません。

神奈川県立音楽堂については、たとえ大建築家の作品であったとしても、日本建築学会賞受賞作品であったとしても、保存のために、自分で納得のいく論理がまだできていません。

ところで、「近代化遺産」の時代というのはやっとな文化財の保存行政が市民の段階に入ってきたということです。今まで文化庁も学識経験者もそういうものに全然気がつかなかったけれども、市民が自分の身の回りの“文化財”を発掘し、提案していく段階ではないか、そういう立場が必要ではないかと思っています。

そういう感じでおそらく門司なら門司というものに対してコンセンサスを得ながらレトロの開発を進められていくなかで、逆に住民の皆さん方が自分たちで何か発掘して提案するような姿勢、あるいは発掘するものがあるかないかの問題にもなると思います。

そういう住民の文化の時代——それは見方によれば文化の開発になるかもしれないですね。そんな立場が必要だと考えています。

さらに、北九州は、「近代化遺産」が全国でも豊富な都市ですから、それをうまく利用していかない手はないと思います。

# '96北九州シンポジウムに参加して



北九州建築局指導部長  
KOUZOU SHIMOHATA  
下畑 洪三

## 日本建築美術工業協会 '96北九州シンポジウムを共催して

この度、日本建築美術工業協会（aaca）の皆様のご尽力により北九州市で'96北九州シンポジウムが盛大に開催されましたことを心よりお礼申し上げます。

日本を代表する著名なパネラーの先生方が出席して開催されているAACCAの過去のシンポジウムの実績をみますと、本市開催で果して成功するだろうか、皆さん満足してお帰りになるだろうかなど、不安がいっぱいなかで準備に取り掛かったことが昨日のように思い起こされます。

まず、開催が決ってからの最初の仕事は、テーマの決定でした。過去のシンポジウムでは、「文化」、「都市」、「景観」といったテーマであり、それにふさわしいものを探すことでした。

幸いにも、aacaの副会長の内井昭蔵先生と本市の野津建築局長がテーマを話し合う機会がありました。

その中で、まちづくりを進めていく場合、常に直面するのは、「開発と保全」の問題であります。これまでのまちづくりの手法を顧みますと、開発の面に重きをおき、環境とか景観を意識した街づくりは少なかったのではないかと。今回のキー・ワードはこのようなものではないかという話しになりました。

本市には「門司港」という、過去東洋一繁栄した港町があります。九州の最北端に位置する北九州市の門司港は、明治から昭和初期にかけて、九州の鉄道の起点として、また、大陸貿易の拠点として、産業・経済のみならず文化の面でも発展してきました。

その後、大陸貿易の減少、エネルギー革命等により、今日ではかつての国際貿易港としての繁栄はありません。

しかし、かつての繁栄時に建設されたエキゾチックな面影を残す歴史的建造物や変化に富んだウォーターフロント、美しく雄大な自然など数多くの魅力ある観光資源が残っていました。そこで、北九州市は、これらの資源を活用して、この地域を歴史・文化・自然と開発が調和した新しい都市型観光拠点として整備し、活力と魅力ある街にするため「門司港レトロ事業」を推進してきました。

この事業は、昔のものをできるだけ忠実に再現しながら、同時に、現代社会のなかでも十分共生していくという「調和的保存」の概念がテーマでした。

『開発と保全』…歴史と環境を生かした街づくり、レトロ都市・門司港の事例…待望のメインテーマの出来上がりです。

テーマが決定してからは、会場の手配、ちらし・ポスターの制作など伊藤事務局長と協議を重ね、順調に準備は進んでいきました。

また、パネラーの先生方はすばらしい陣容となりました。本市では、市民のまちづくりへの意識の高揚や参加を図るため、昭和62年より「まちづくり連続シンポジウム」を開催しています。このAACCAのシンポジウムで第61回目を迎えましたが、記念すべきすばらしいメンバーになりました。

さらに、うれしく思いましたが、あいにくの雨にもかかわらず、県知事をはじめ、多数の一般市民が参加していただいたことでした。

多くの方々に支えられ、暖かい助言を受け、著名な先生方とも直にお話しをすることができ、すばらしいAACCAの会員の皆様とも知り合いになる機会をいただき、大変実りの多いシンポジウムとなりました。

シンポジウムの後の交流会におきましても、パネラーの先生方と参加された皆さんとの意見交換などで、大変有意義に楽しく過ごされたと聞き、あらためて感謝している次第です。

最後に、このシンポジウムの開催にあたって、前回開催の新潟県・市の適切なご教示にお礼申し上げますとともに、次回の仙台市、今後開催予定の岐阜県の方々のご来場いただいたにもかかわらず、十分なもてなし、説明が出来なかったことをお詫び申し上げますとともに、今後の社団法人日本建築美術工業協会の発展と次回以降のシンポジウムの成功を祈っております。



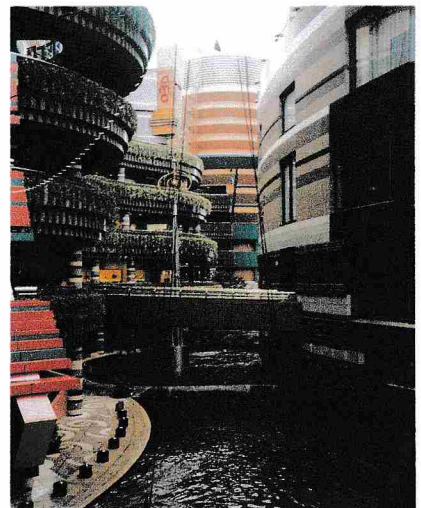
aaca会員  
株式会社 鈴木弘人設計事務所社長  
HIROTO SUZUKI  
鈴木 弘人  
宮城県仙台市青葉区昭和町3-15  
ネオプラザ北仙台510号  
TEL.022-276-7457

## 「北九州シンポジウムに参加して」

aacaに入会させていただいてからだいぶなりますが、まともにシンポに参加したのは今回が初めての気がします。会報誌によりこれまでの様子の好評で来ている事は知っていますが、実際に参加してみたらやはり噂どおり盛会で内容も大変よかったですと思いました。

日頃はスリーピング状態で傍観しているただの一地方会員ではありますが…今回の参加の主な理由は今年は仙台開催と決定したためのその予備知識の勉強方々と云うのが本音で吉田イサム氏の二人で出かけた次第です。仙台市の行政側の担当者も当然来ておられましたが、私のような浅学非才な者にせめて下足番ぐらいのお手伝いしか出来ませんが、そうしているうちに早速この2月に協会と仙台市との具体的な準備会合が開かれるとの連絡がありいよいよ本格的に5月の開催にむけて動き出したようです。よい企画でより多い参加者に好評を得る内容のものをと、これから主催者のご苦労が大変な事と思います。

今回は北九州と云う活気ある臨海産業都市の地で「開発と保全」をテーマにしたグレードの高いシンポでしたが、さすが一流のスターキャストに恵まれ各パネラーのやりとりを内井昭蔵さんのコーディネートよろしく多数の参加者に満足を与えたのではなかったかと思えます。歴史と環境を生かしたレトロ都市門司港の保全や博多のキャナルシティー等大再開発のモデル的なものまで、大変興味深く観て参りました。シンポは内容にもよるが技術講習会ではないの





aaca会員  
株式会社アルファ 代表取締役社長  
日本インテリアデザイナー協会本部組織委員  
西日本インテリアプランナー協会理事  
YOSHIHIKO KITAMURA  
**北村 新比古**  
福岡県北九州市小倉北区小文字1-2-34  
TEL. 093-522-0644

## '96北九州シンポジウムに参加して

で真面目一方だけでなくユーモア等あり面白さが無ければいけないし、その場の時間帯の中で楽しく感動を与える必要性に映画や芝居と同様の共通したものと思います。

私(65才)は停年も過ぎた今は正直なところいまさら建築の勉強は息子達にまかせて、もっぱらイクスカーション等でその地のランドスケープを眺め地場特有の地酒と料理が唯一の楽しみとしており、その点今回はその恩恵にあずかり満足致した幸いです。

ところで今回はTOTOさんには大変お世話になりました。感謝申し上げます。さすが本社工場のダイナミックなスケールと製品行程の見学等親切丁寧なご接待を受け又ノーマライゼーションとしての組立施設のバリアフリー建築を見せていただき大変参考になりました。

又ついでに念願だった北原白秋の里柳川の水郷で感傷に浸る事が出来たのはこれまた収穫でした。最後に芦原会長のお元気な姿に接しそれこそ地酒と美味な料理の場に同席させていただき大変光栄に思っております。少々おだづ(仙台弁でお調子がよ過ぎること)過ぎたそのついでとして伊藤事務局長から原稿依頼の強制命令を賜わり仙台シンポしっかり頼むよ、と(これは親心と好意的に受け止め)ハツバをかけられたら。aacaのモットー、建築家と芸術家が一緒に仕事をし、社会にその知識を還元すると云う芦原会長の言葉通り、そのためのシンポジウム等も大きな要因であると思えますし、又一つの組織として各会員の絆としても必要なものとして続けて行くべきでしょう。今回の開催とご尽力いただいた協会の方々始め北九州市の皆様へ感謝を申し上げますと共に今年の仙台開催の成功を願うものです。

日本建築美術工芸協会に入会して間もない10月31日「'96北九州シンポジウム」が、私の住む街・北九州市の国際会議場で開催されました。伊藤事務局長を始め事務局や会員の方々とお会いすることは出来ましたが、残念ながらお話をする十分な時間はありませんでした。それでも皆さんの「都市」「建築」に寄せる情熱が伝わる感激の一日でした。開会冒頭の芦原義信先生の挨拶。そんなに長いお話ではありませんでしたが、その一言一言に「建築」そして「都市」を造る思い、また見守る喜びを感じることが出来ました。芦原先生の著書に出てくる革新的な創造への意欲や情熱と同様、「よりよい街並みを造る意識革命」や「新しい創造の時代」を現実のものとして北九州市の都市構想が進んでいます。歴史と環境をいかした街づくり「開発と保全」をテーマとしたこのシンポジウムは協会や建築世界の境界を越え、市民や国全体の問題としても誰もが関心を持たねばならない新時代への呼び掛けだと思えます。記念講演、パネルディスカッションともに素晴らしいものでした。何かの本に「曼陀羅」の「マダ」は心髄、「ラ」は得ることと書いてありました。街の存在としての拠り所を喪失しがちな現在、人間の為に、また自然世界の為に、許される快適さを見つけたいと願っている私には、このパネルディスカッションは一つの「マダ」(心髄)「ラ」(得る)でもありました。私は「北九州を大切に『星降る街を創る会』」という「開発や保全」もテーマとした地元を愛する会をつくってこの1月でちょうど5年の節目を迎え、また新しい形で再スタートしようと計

画しています。その5年間に、会の思いはどのようにすれば十分に伝わるのか、など多くの問題が出ました。シンポジウムの価値もその目的、情報や意見の伝達が充分なものか否かに大きく左右されると思えます。良寛はある手紙に「吹雪の中、わざわざ私の草庵へ、情愛のこもった詩をもたられ、その気持ちに対してどのように報いたら良いのかわからない。ただ筆を口に含みあなたの思いに恥じるばかりだ」という漢詩で、自己を中心に述べ、「どうぞ、雪を踏みわけて出てきてやって下さい。粗末な庵ではあるけれど、一夜語り明かそうではありませんか」と相手を中心に短歌で述べています。わざわざ出向いた客は約束の日、良寛がお斎(とき)の留守とかで、することも無く、ついに掃除をして帰るはめになりました。心や思いや人柄が伝わると、許せる世界また快適な世界が広がるのかも知れません。素晴らしいパネラーの思いの一つ一つが伝わり、うなづき続けた素敵な1日でした。新しい視座と学びの機会を得られそうなこと、新しい出逢いの可能性があることなどを感じ幸せでした。最後に日本建築美術工芸協会に入会させていただいたこと、またこのシンポジウムに参加出来たことに感謝しております。



# 第6回AACA賞

審査委員長 内井 昭蔵 (建築家・aaca副会長)  
審査委員 會田 雄亮 (陶芸家・aaca理事)  
榮久庵憲司 (インダストリアデザイナー・aaca理事)  
近江 栄 (建築家・aaca理事)  
澄川 喜一 (東京芸術大学長・aaca理事)

## 審査総評

内井昭蔵

今回は昨年とほぼ同数の35点の応募があった。審査は例年にない応募されたパネルを審査員が全員で目を通し、各自推薦する案をもとに自由に討議し現地審査をする入賞候補作品を6点選定した。

その後、複数の審査員がグループをつくり各候補作品を現地審査し、慎重審査の結果、以下の3点を選定しました。

### ◆AACA賞として

上山良子(ランドスケープデザイナー)氏設計の「平和の森公園」長岡市本町3丁目

### ◆AACA特別賞として

さっぽろホワイトイルミネーション実行委員会(監修 伊藤隆道氏による)企画設計「さっぽろホワイトイルミネーション」

### ◆AACA特別賞として

坂倉建築研究所・並びにモニュメントデザイン西野康造氏、家具・サインデザイン椎名啓二氏「茅ヶ崎公園プール」応募作品はいずれも環境や景観に配慮されたすぐれたものであったが、なかでも入賞作品は特にすぐれたものであり、本協会が意図する理念に合致するものであるとの高い評価を得たものであった。

今回は、特別賞が2点となったが、これはいずれも甲乙つけ難く、審査員全員の同意を得て同点評価とした。

## AACA賞審査講評

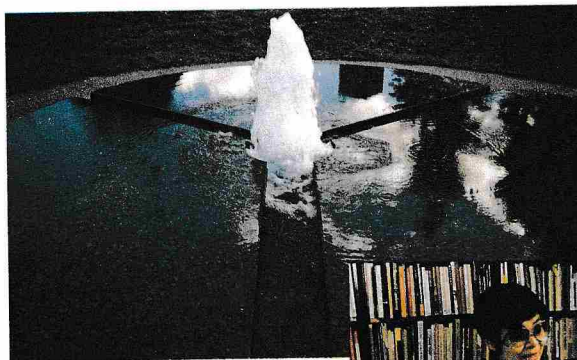
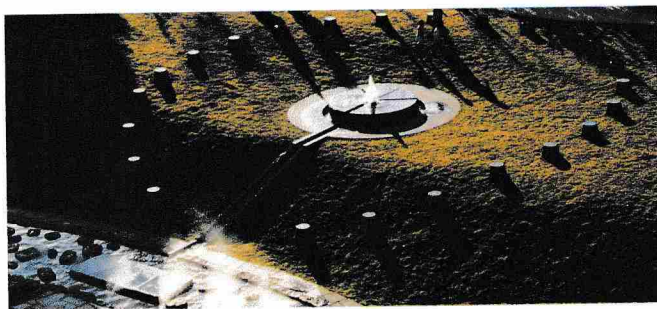
會田雄亮

### 「平和の森公園」

長岡市本町3丁目

この計画の一番の見どころは、小川を取り込んで川の両岸に展開された環境作りであろう。堤のノリ面を利用して客席を作り、対岸もゆるやかな緑の傾斜地に作り変え、一体の景観に計画した時点でこのデザインは成功を約束されたようなものだと思う。河川堤を変更する事自体作者が語っているように、規則を変え関係者を説得するのに大変なエネルギーが必要であったであろう事は想像に難くはない。

戦争中この地で亡くなられた方々の鎮魂の像を囲みやわらかな緑の芝生が広がり、前面の石組の舞台で締めた緩急の構成は絶妙である。夏の間は水量も減り子供が川遊びをすると云う。本来この様な地形は町のどこにも見られるものだが、それをこのような清々しい公園に作り変える事こそが、やたらに彫刻を置くことしか能のない昨今の環境造形指向に対し、心強い警鐘となつて好感の持てる作品になっている。



上山 良子氏



**AACA特別賞審査講評** 近江 栄

「さっぽろホワイトイルミネーション」

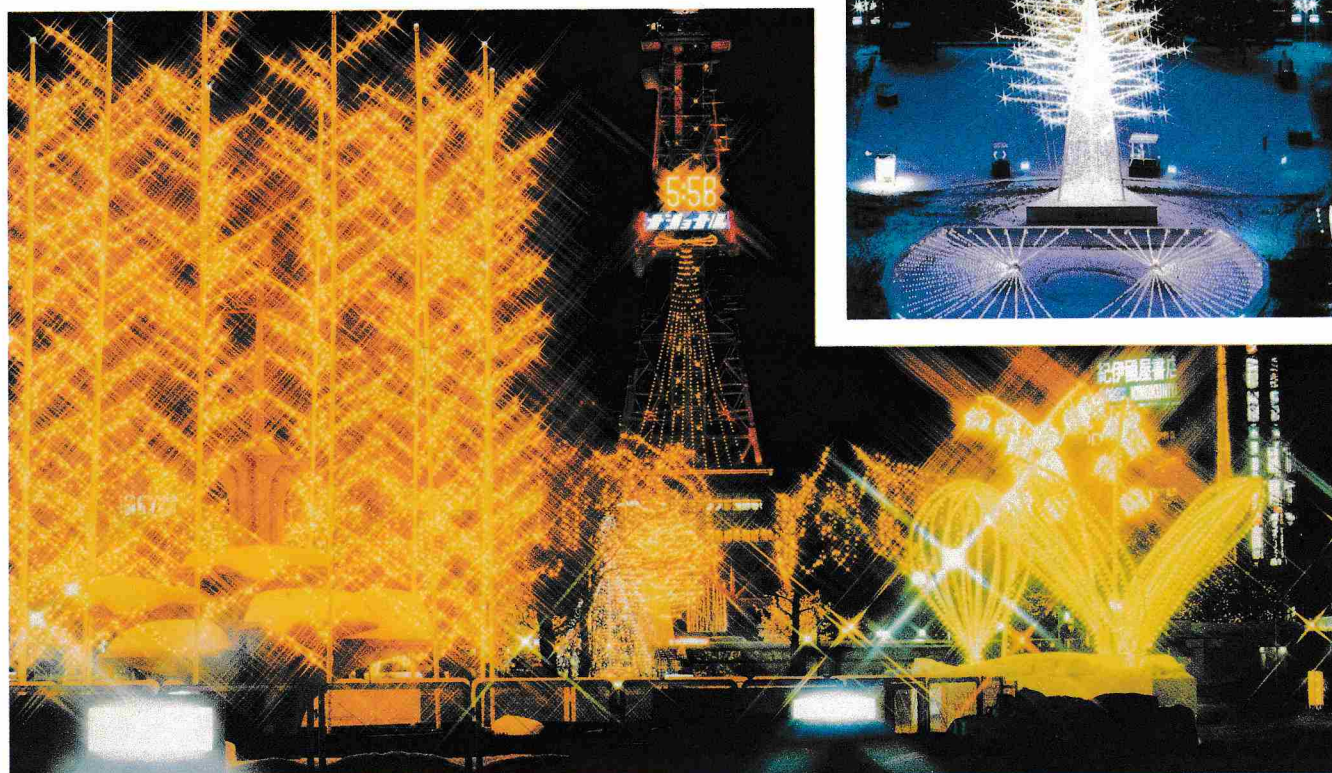
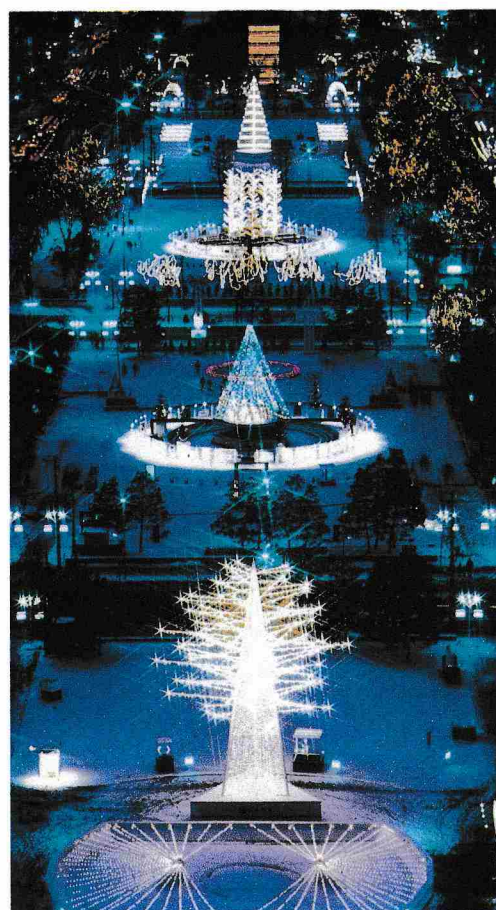
1981年12月大通公園2丁目広場に立った1本のひかりのオブジェから始まって16年。

遂年その規模を拡大し、札幌の冬の風物

詩として「さっぽろ雪まつり」とともに定着している「さっぽろホワイトイルミネーション」は、白い雪に咲く光の一大ページェントとして、全国各地のイルミネーションの先駆的な範例となっている。

前回は過去最多の365,000個の電球を使用し、巨大な光のオブジェをメインに多数のイルミネーションツリーやオブジェな

どが40日間（11月22日より）にわたって札幌中心部を美しい光の帯で毎年変化が加えられ、ともすれば暗い北国の都市空間の夜を華やかに彩っている。（伊藤隆道 監修）札幌市民や道民ばかりでなく国内外から訪れる観光客にも大きな驚きと感動を与えている、すぐれた業績として特別賞を贈る。



## 「茅ヶ崎公園プール」

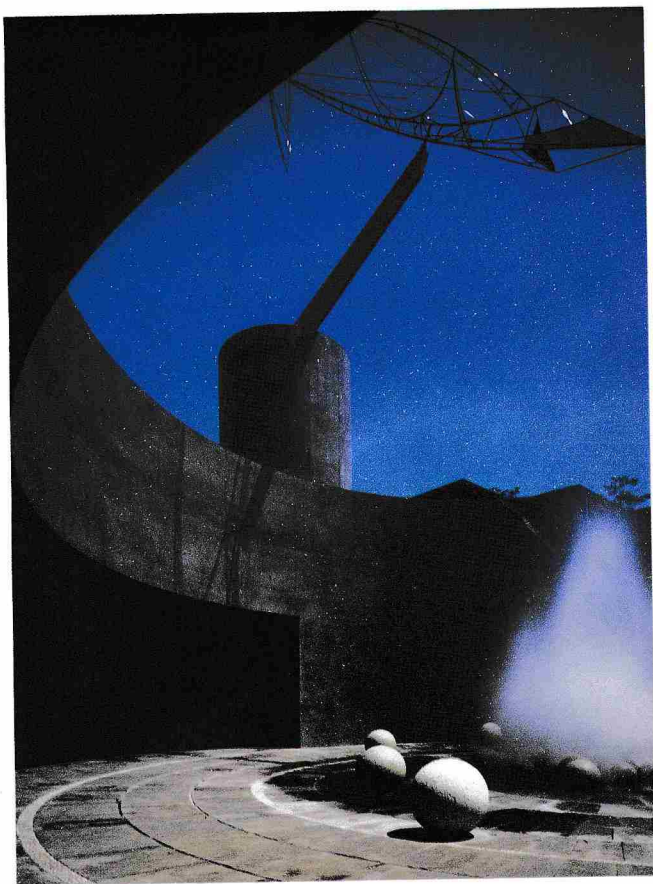
茅ヶ崎公園プールは、横浜市港北ニュータウン内の公園に設けられた屋外プールである。設計者は市のマニュアルに示された要求に対応しながら直径21mの円形プール、幼児プールから成り、人工の滝から落ちる水を利用したスライダーが設けられている。

敷地周辺の既存林を極力保存しながら活用する配置計画を巧みに行き、プールサイドの間際まで豊かな自然を感じさせる。

この施設の主階は園路から4m切り下げたレベルに設け、管理棟の屋上も植栽を施し、芝生広場からの斜面の広がりを持続させることにより建物のボリュームを自然の地形と風景に馴染ませている。とくにコン

クリート打ち放し仕上の精度の良さは目を惹く。

施設の平面形は円形プールを起点にスライダーから管理棟に連続する螺旋形状がデザインモチーフになっている。とくに西野康造の作になるモニュメント“空をゆく”は、自然風向に応じてゆったりと流れる時間を子供達に語りかけていて好ましい。



坂倉建築研究所 東 泰規 氏

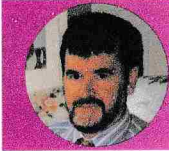


西野康造 氏



椎名啓二 氏

# アピアランス 会員作品紹介



彫刻家  
ROBERTO JULIO BESSIN  
**ロベルト・フリオ・ベッシン**  
54Second street, Newport, Rhode Island U.S.A 02840  
TEL. U.S.A(401)847-2527

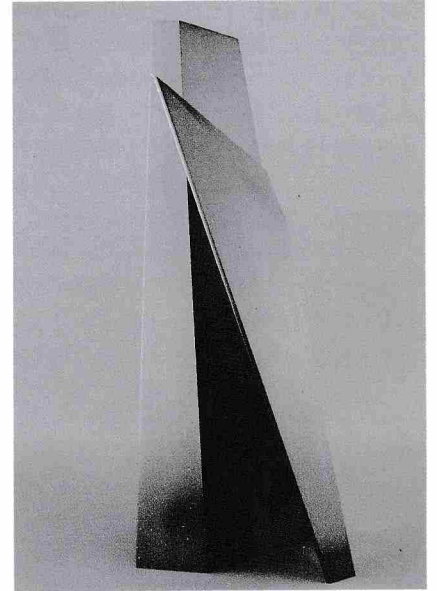
シマフクロウは北海道天然記念物に指定されている保護鳥であり、野生生物の彫刻を通して、自然の大切さを考え、環境問題に関する警告のため製作しました。



「SHIMAFUKURO」  
設置場所：北海道常呂郡置戸町  
12000mm×4000mm×2000mm



人々の集まる街の広場に、核になってほしいと思う作品で、開放された空間と囲われた空間を、幾何的に二つに折り曲げた面と、低い三角錐で構成し、鉄素材の特性を生かし、素朴に力強く簡素化した造形を表現している。



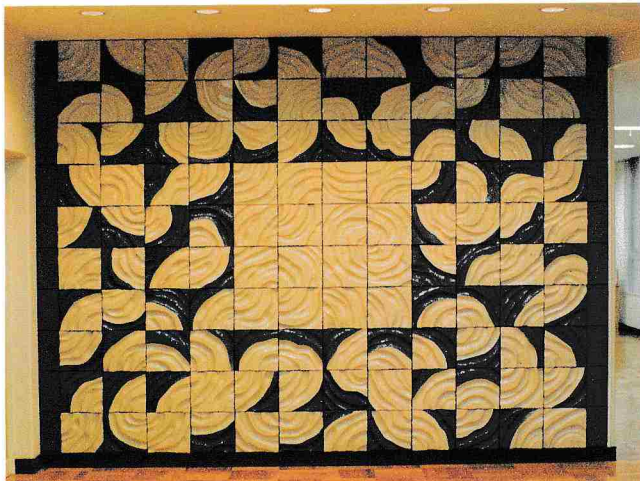
「傾斜した空間」  
設置場所：東京都新宿区  
高田馬場  
高橋歯科医院  
130mm×400mm×300mm



建築彫刻家  
TAKEMI ENOMOTO  
**榎本 建規**  
東京都新宿区荒木町22番地サクラガーデン  
TEL.03-3351-6704

東京都文京区立昭和小学校のランチルーム入口の壁面レリーフ(磁器)を製作しました。H3m×W3.5m。厚さ5cm。題名「雲の食卓」。イメージ「雲たちはいま食事のまっさい中、青空のおいしい水をのみながら、お日さまの光をたっぷりあじわって『ごちそうさま』と飛んでいきます。」建築設計は株式会社山下設計。製作は岩尾磁器工業株式会社。平成8年10月完成。

「雲の食卓」  
設置場所：東京都文京区立昭和小学校  
3000mm×3500mm×50mm



画家 モザイク家  
SAKAE SEKI  
**関 栄**  
大阪市住吉区苅田2-16-5-406  
TEL.06-697-8900

無数の星々と、いのち溢れる宇宙への想いをガラスと石のモザイクで、どなたでも楽しんでいただけるようにメルヘン調で表現して見ました。これは自由に設置替え出来る小品ですが、拡大が可能な構図を考えて作りました。

「LE STERRE(星々)」  
設置場所：個人宅客室壁面  
370mm×540mm×20mm





aaca会員  
人形作家  
SAYUME OKUDA  
奥田 小由女  
東京都練馬区富士見台2-22-10  
TEL.03-3990-5522

## 人形所感

桃の節句にはお雛様が飾られるのを楽しみにした思い出もあるけれど、近頃は建築の様式や住まいの習慣の変化等から段々と赤い毛氈を敷きつめた豪華な段飾りの雛人形を観る機会も少なくなりました。生活の流れが年々忙しく慌たしい感じになりおおらかで心豊かな雛の顔などゆっくり眺める暇もなくなってしまったかの様である。

そんな中で私はただひたすらに人形の世界に夢を追いかけていつの間にかかなり長い年月を重ねて来た。私にとって人形はただ愛らしい愛玩物というのではなく私

の心象にあるものを人形というひとがたをかりて表現する自由で未知の世界である。平成元年に広島県婦人総合センター(愛称・エソール広島)のロビーに大作レリーフ「天翔る讃歌」(タテ2mヨコ1.3m)を完成した時は二年余りをこの作品に打ち込んで制作した。そして又横浜市の上郷・森の家に内井昭蔵先生にお世話になって完成した「しあわせの森」などの大作レリーフは彫刻と絵画と工芸を一体化した自由な発想で思い切った仕事が出来て幸せであった。人形の仕上げは古くから日本に伝わる胡粉「牡蠣の殻の粉末」を丁寧に膠で溶いた上澄みを何十回もうすく塗り重ねたりその行

程の数々は何処迄も細かく根気のいる手仕事であるが大作レリーフの場合は体力的にはかなりハードでも仕事自体は伸々と大作ならでは味わえない充実感であった。

現代の生活空間の中で人形がどの様にその必然性を持って受け入れられるかは大きな課題であるが私自身は人形という従来の概念を大きく越えて新しい造形の世界をいかに開拓して行くかが大事なことで現代の生活の中に生きた芸術としての人形を志したいと念じているがその一方この古くから伝わる伝統の美しい味わいも忘れてはならないものの様に思うこのごろである。



海のパワ



涙





aaca理事  
徳島県立近代美術館  
東京都写真美術館 館長  
TAMON MIKI  
**三木 多聞**  
東京都北区中里3-18-2  
TEL.03-3910-2637

## 彫刻と場

今日いろいろな場所で彫刻作品を見ることができ。パブリック・アートと呼ばれるものもあれば、プライベートな場に置かれているものもある。たしかに彫刻は以前には考えられなかったほど、社会に対する発言権をもってきていると思う。そのことは喜ばしいことであるが、よく見るといろいろな問題を含んでいるものも多い。何となく彫刻を設置することによって、文化的な環境が生まれるという安易な考え方によるものも決して少なくないし、そういうところから「彫刻公害」などという批判も生

まれてくる。

彫刻の質や内容が重要であることはいまでもないが、場所や設備の仕方について、作者はもちろん、設置する関係者が充分検討する必要がある。彫刻設置のプロセスとしてはオーダー・メイド、つまり特定の作家に依頼して製作するのがベターであるが、それに代る前提としてコンペなど野外彫刻展を開催する例が多い。

具体的な成功例を挙げよう。1991年宇部市の現代日本彫刻展の場合、グラン・プリを獲得した土屋公雄の「底流」は同市街地で架け替えのため取りこわした橋のコンクリート製の橋脚一部を活用した作品であ

る。作者は国内外各地のプロジェクトに参加してきた。「物には命があり、橋脚も人間と同様、生命という価値観で見られていると思う」と語っている。一度廃棄されたものに最小限の手を加えることによって、ものの生命をよみがえらせている。字部という場と深いかかわりのあるものをとり上げることによって、見事に新しいモニュメントをつくり上げた。宇部市の関係者の熱心な協力によって可能になった例であるが、ある場所でかけがえない作品が生まれたことに、深い感銘を覚えた。



土屋公雄 底流 橋脚(コンクリート破材)・鉄 380×360×300cm Kimio Tsuchiya UNDERCURRENT



aaca法人会員  
株式会社河合紀陶房代表取締役  
中国中央工芸学院客員教授  
(財)京都陶磁器協会理事  
京都商工会議所科学工業部会副部長  
TADASHI KAWAI  
**河合 紀**  
京都市山科区川田清水焼田地町12-1  
TEL.075-581-5550

## 陶画に託す私

人間の歴史年代では、まずあまり変化しない陶器は、古来、建築・墳墓の壁を飾ってきた。千年単位、また時には紀元前300年の昔の陶壁画も残っている。そのように、陶器と建築は密接な関係を保って、進化してきた。

建築の空間において、燃えない、変色しない、メンテナンスが楽だということで焼物は良い材料ではある。しかし、重くて厚く、焼成変形しやすく、大平面が得られないという欠点もある。

今般、私は新しい手法で作成された薄板を得て、これに着色、彫刻、造形を施し『羅陶』と名付けた。

『羅陶』の『羅』はうすぎぬという意味である。したがって羅城とは、一重の薄い堀をめぐらした城のことであり、いわゆる羅城門とは、一重の門扉の簡略な城門のことになる。『陶』とは、陶化・陶然などの熟語

が示すように、陶が焼きしまる意に通じる。

『羅陶』は、大きく平たい陶板なので、あたかも画家がキャンパスに向かうように、筆で直接描け、自由奔放な構図が得られる。しかも、彫刻が可能なので、より巾のある表現になり制作者としての興は増すばかりである。

軽量の利を生かして襖にも衝立にも屏風にも、格天井にも、自在に利用できる。

さらに、不燃素材の有益性として消防法をクリアできる点もあげられるだろう。この程、平成9年2月26日から3月4日まで、東京高島屋美術画廊で古稀記念展を開催し、この羅陶による作品も発表した。

個展の出品作品の中で、『舞う』と題した一作は、巾が60センチメートル、縦90センチメートルの羅陶に波紋の彫刻を上下に、ラピスラズリーでブルーを発色させ、陽に舞う白鳥を表現した。応接室とか、小さいホールにはうってつけだと思

う。『鶏頭』は、羅陶を紙のような素材として扱ってみた作品である。薄く軽い長所を生かし、二枚折りにしつらえてみた。空間を仕切ったり、目隠しに置いたり、さまざまな用い方への提案である。

図柄は鶏頭を日本画の筆捌きで、描いてみた。黒の線描はもちろん墨色のイメージを意図している。この作品は和風に仕上げてみたが、廊下の角とか事務所など、洋風の場所にも、違和感はないと思う。

横巾3メートル60センチの大作は「醍醐」と、春らしい題を付けて組み上げている。中にはめ込んだ円形の35センチメートルの陶板は、自然の植物をそのままに焼き付けて、植物のもつ生気を表現した。

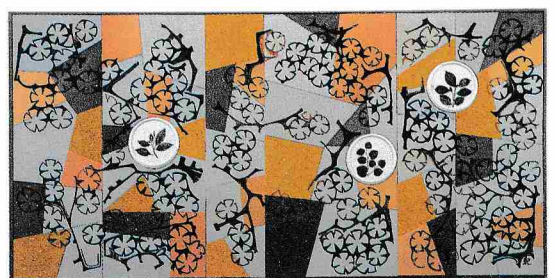
この大作は分解できるように構成し、個展会場で組み立てたが、一部が東京の事務所に嫁入ることとなった。陶額の外に工芸作品も60点陳列した大個展になり、全体に元気の出る作品と言われ、作者としては大満足している。



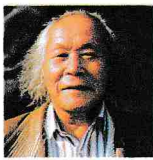
舞う 陶額 高さ90.0×巾60.0cm



鶏頭 衝立 高さ105.0×巾50.0cm(2双)



醍醐 大壁飾り 高さ180.0×巾360.6cm



aaca 法人会員  
株式会社 傳来工房代表取締役会長  
(社)京都工業会副会長  
京都インテリア産業協会会長  
(社)京都経営・技術研究会理事長  
NARAJI HASHIMOTO  
橋本 奈良二  
京都市南区吉祥院新田式の段町45  
TEL.075-681-7321

## 「京の匠とその変遷」

『日本書紀』に記されている応神天皇の詠に「千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ国の秀も見ゆ」という詠がありますが、この「千葉の」は、「青丹よし奈良の都」の「青丹よし」と同様、枕詞で、「葛野」にかかり、その「葛野」が詠まれています。私はその「葛野」に生まれ、蝸型鑄造というものづくりの家に育ちました。

建都1200年の初代天皇、桓武天皇は55代天皇であるのに対し、応神天皇は15代天皇と言われており、この時代の歴史には各説がありますが、少なくとも桓武天皇よりも400年は古い時代の天皇であります。そこに、「百千足る」と詠まれていることは当時から色々なものづくりが集結して、ものづくりに励んでいたものと思われまます。それを示すものとして『万葉集』の巻11—2648番の詠人未詳歌に「かにかくに物は思はじ飛驒人の打つ墨縄のただ一道に」という歌があり、各地よりものづくりが都に集まっていたことがうかがわれます。

ものづくりの神様を挙げましても、少なくとも、酒造り（バイオテクノロジー）の松尾神社、繊維（生糸）作りの蚕の社、金具作りの車折神社があります。また、稲荷神社も一般的には商いの神とされていますが「いなり」の語源は「鑄が成る」からであるという説もありまして、現代も秋のお火焚きには全国の鍛冶屋や鑄物師が火を一日休ませて京都の稲荷神社に集まるほどです。

桓武天皇の時代に入り、平安京が造られ、都となって、各種の神仏具、宮中用品などが一層必要となり、製造が盛んになって来ました。何よりも京都のものづくりはセレモニーの場で使われるもの、すなわち、神社、仏閣、宮中における儀式の場の用品、つまり仏具であり、神具であり、そして、僧侶、神主、公家等の衣服に至るまでが中心にありました。

セレモニー（儀式）の場であるだけにその雰囲気づくりに相応しいパフォーマンスを持たねば採用されませんでした。従って、京の匠のつくりものは、勢い、繊細、精巧、そして、超高級なものが中心になって、時代と共に変遷して来ました。

ご存じのように日本の文化は、百濟、新羅、高麗等の朝鮮半島の各王朝との交流と共に、中国の隋、唐をはじめとする中国各王朝との交流による当時の最先端文化の導入が盛んでありました。遣隋使、遣唐使の人々が、長い苦難の旅の中で日本に帰国し、伝えた数々の文化が、日本での製作を要請されて、当時のものづくりの努力がその文化の根底を支えました。

最も大きな影響があったのは仏教の中でも密教でありました。真言密教・天台密教は奈良時代までの仏教と趣を異にする莊重かつ絢爛華麗な表現を求めました。その数々の僧侶の中でも最も影響の大きかったのは空海（弘法大師）でありました。今に残る京都の東寺、高野山、嵯峨の大覚寺等を見られても、諸々の当時のものづくりのレベルの世界的な高さが推察されるわけでありまます。建築関連の皆様にも当時の五重の塔や大伽藍等を見られてお解りかと存じます。

面白いことにはその東寺の周辺から葛野に至る間に多くのものづくりの町がありました。

今、平安朝のものづくりを簡単に書きましたが、平安以来、室町、鎌倉、戦国、江戸、そして明治、太平洋戦争前、太平

洋戦争後50年、その間時代の要請と共に一貫して、その流れが随所に見られます。各時代に新たに起こった公家文化、茶道文化、華道文化等を根底で支えたのも今日の匠の技術でありました。興味深いことに、武家文化の時代も、例えば八条には平清盛の平家御所があり、六条には源頼義の源氏御所があります。その間の七条の町には針座をはじめ甲冑、緋緘等華麗な武家の装いも要請に応じて作り上げておりました。私はその葛野郡西七条に育ち、諸々の匠やものづくりと接して来たわけでありまます。この一体には、現代の世界的な最先端のものづくり——簡単に挙げましても、島津製作所、三菱重工、オムロン、ローム、ワコール、日本電池、村田製作所等——が存在します。

時間の関係もありまますので各年代には触れられませんがその時代時代を根底において支えた京のものづくりに流れる匠スピリットとか、職人シップとか、ものづくりマインドとかをお話しておきましよう。

匠とは一つの手技を磨き続ける人。よく素晴らしい仕事をする職人さんが「職人は、毎日毎日死ぬまで勉強です」と言い切っているのを耳にしますが、職人と



西本願寺、大灯笼(古い物件)



安政二年の木型鑄型(香炉の型の一部)



「湯王の盥」復元品



先代作の香炉

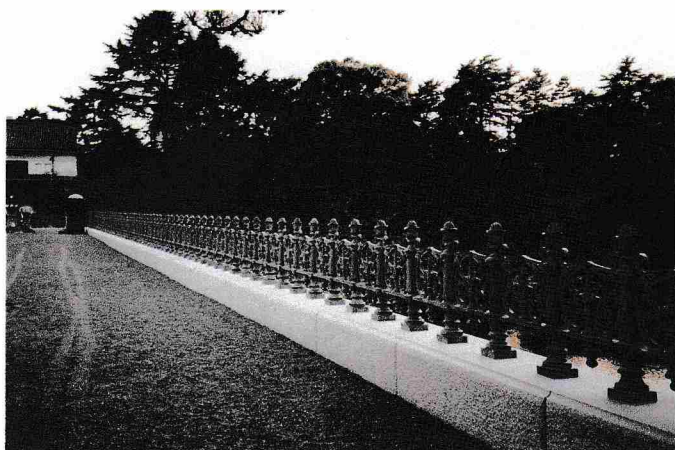
は、ただ単に今日の仕事をこなすだけでなく、古いものを大切に、新しいものを取り入れながら明日の仕事のレベルアップに努力をし続ける人の事でしょう。彼らのこう言った日々の努力が、1300年も前から様々な手仕事を育て、そして、日本文化をその根底にあって支え、創造して来たというべきでしょう。また、知識だけではものはできません。つまり、自分の生のままの経験を積み重ねれば残っていくというわけです。職人とは、頭がどんなに働いても眼や耳や手が、これに協力してものを作り出さねば事は運ばぬということをよく知った人でありませう。そして、名もなく貧しくともすべてを忘れて一心不乱にその芸を磨く人達の、ただひたすら腕を磨き、そして、辛抱を続けるものづくりのスピリットが素晴らしいものを残していったようです。

そして凄いいことには、伝統のものづくりで、反逆のエネルギーのないものづくりは決して新しい時代と共に生きていけなかったということです。先ほど述べたように遣隋使、遣唐使はじめ、世界の最新文化は容赦なく、教育もなく見聞も狭い匠や職人に、時代の流れの変化を要請

しました。時代の流れによって形を変えていかねば生き残れなかったのです。

日本の何十という藩の中でつくられていた伝統製品が、明治維新後ほとんど姿を消しておりますが、京都にはしっかりと伝承されているものが多くあります。伝統とは時代の流れによって形を変えていくものであり、最高のものを作るという伝統のバックボーンにその時代時代の研ぎ澄まされた完成を織り込んで来たものだけが伝統を受け継いで来たようです。伝統だからといって過去の栄光に甘えていては時代に残れないというベンチャースピリットが、時代の変遷の中で京の匠が日本の美の文化を支えるというプライドと共に息づいてきたから京都では伝統が残されているのでしょう。

(社)日本建築美術工芸協会の方々がかつての高僧・名僧のような、時代の先端を行くような方々です。皆さんの素晴らしい美意識や感性を京のものづくりにぶつけていただければ、必ずや京のものづくりの長い歴史で鍛えられた技はデザイン、コスト、デリバリーの厳しい枠を超えてご期待に添えると思います。



皇居二重橋前高欄 復元(最近の物件)



「職人」の小物鋳造物

発行：(社)日本建築美術工芸協会  
 Phone 03-3457-7998  
 Fax 03-3457-1598  
 〒108 東京都港区芝5-26-20  
 建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会 広報委員会

広報担当理事 柳澤孝彦、

玉見 満 (委員長)、高部多恵子、坂上みつ子

富田俊男、北村孝昭、石田真人、

渡部毅志、高塚信吾

制作協力：(株)SP建材エージェンシー



# aaca会員募集のお知らせ

豊かな美術的環境の創造を目指す団体です。

建築・美術・工芸等の分野の方々による交流・協力を……………。

## 会員活動

- 都市景観シンポジウム(京都、長野、水戸、静岡で開催)
- 記念講演、シンポジウム
- 交流の集い
- 研修見学会
- aacaトーク 45回を数える講演者を囲んだパーティー形式のトーク。
- 会報の発行 多彩な内容で毎回数多くの参加者を集め、会員相互のコミュニケーションを活発に図っている。

## 理念

(社)日本建築美術工芸協会は、建築家、美術家、工芸家その他の人びととの連携と協力により、豊かな芸術的環境の創造と保存を図り、これを通じて日本文化の向上、発展に寄与することを理念としています。

## 文化活動

- aaca賞  
優れた芸術的環境づくりを表彰しています。
- ストリートアート・デザインコンテスト 街中の公共空間の環境づくりに貢献する優れたストリートアートデザインを公募、表彰。
- aaca作品写真展
- 各種展覧会(ヨーロッパ町並展等)
- 「都市景観デザインへの提言」建築業界誌に「都市景観デザインへの提言」を連載し、わが国の芸術的環境の創造と保存を提案しつづけています。
- 地域サービス活動 文化は地域の気候風土、風俗、習慣、歴史伝統などに育まれることを理解して、新しい地域文化の形成をめざした地域サービス活動と取り組んでいます。

## 沿革

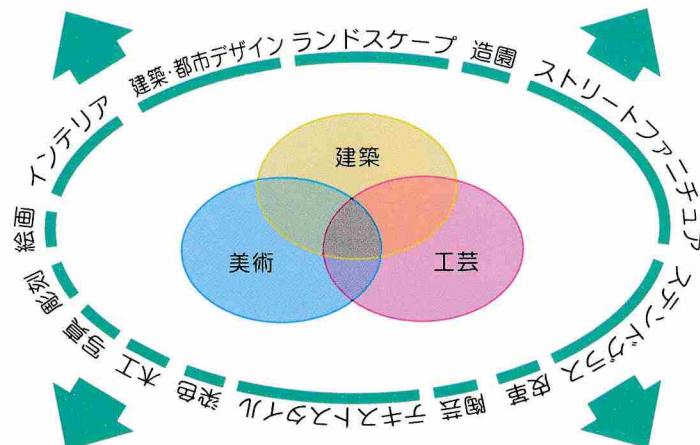
1968年、「新しい建築のなかに美術・工芸・造園などの造形作品をとり入れ、人間性豊かな環境づくり」のために、建築、美術工芸に関する方々相互の交流をめざして、任意団体「建築美術工業協会」を設立。講演会、展覧会、見学会の開催、会報の発行などの活動を続けてきました。1988年4月21日、より幅広い方々との交流を深めると共に、より一層の飛躍をめざして改組、日本建築美術工芸協会を設立しました。そして同年11月28日に文化庁所管の社団法人としての設立許可を得、以来芸術的環境の創造を目指し、以前にも増して活発な活動を続けています。

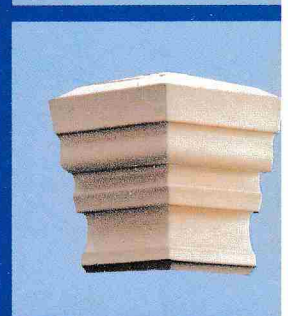
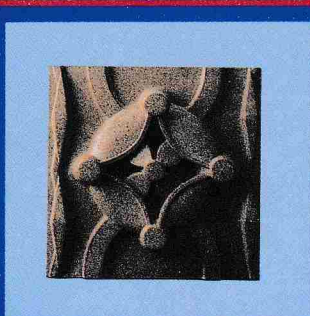
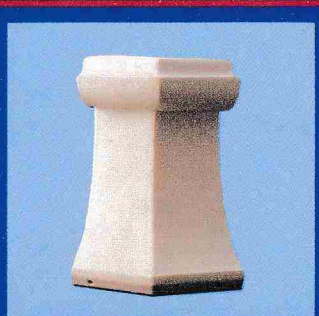
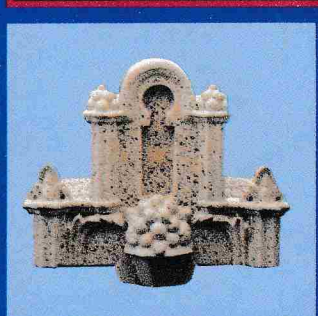
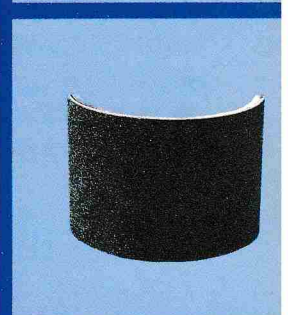
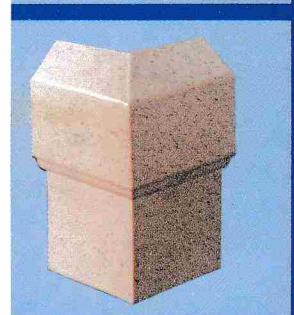
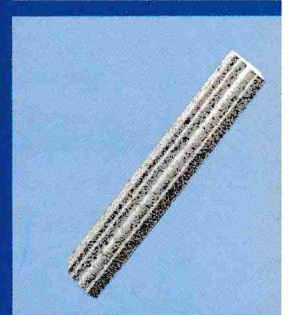
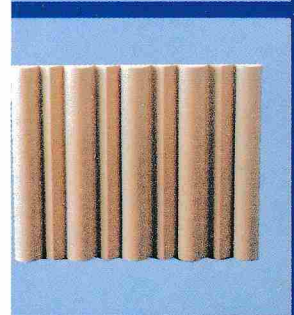
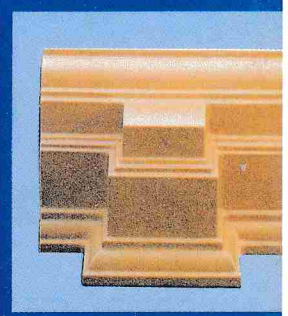
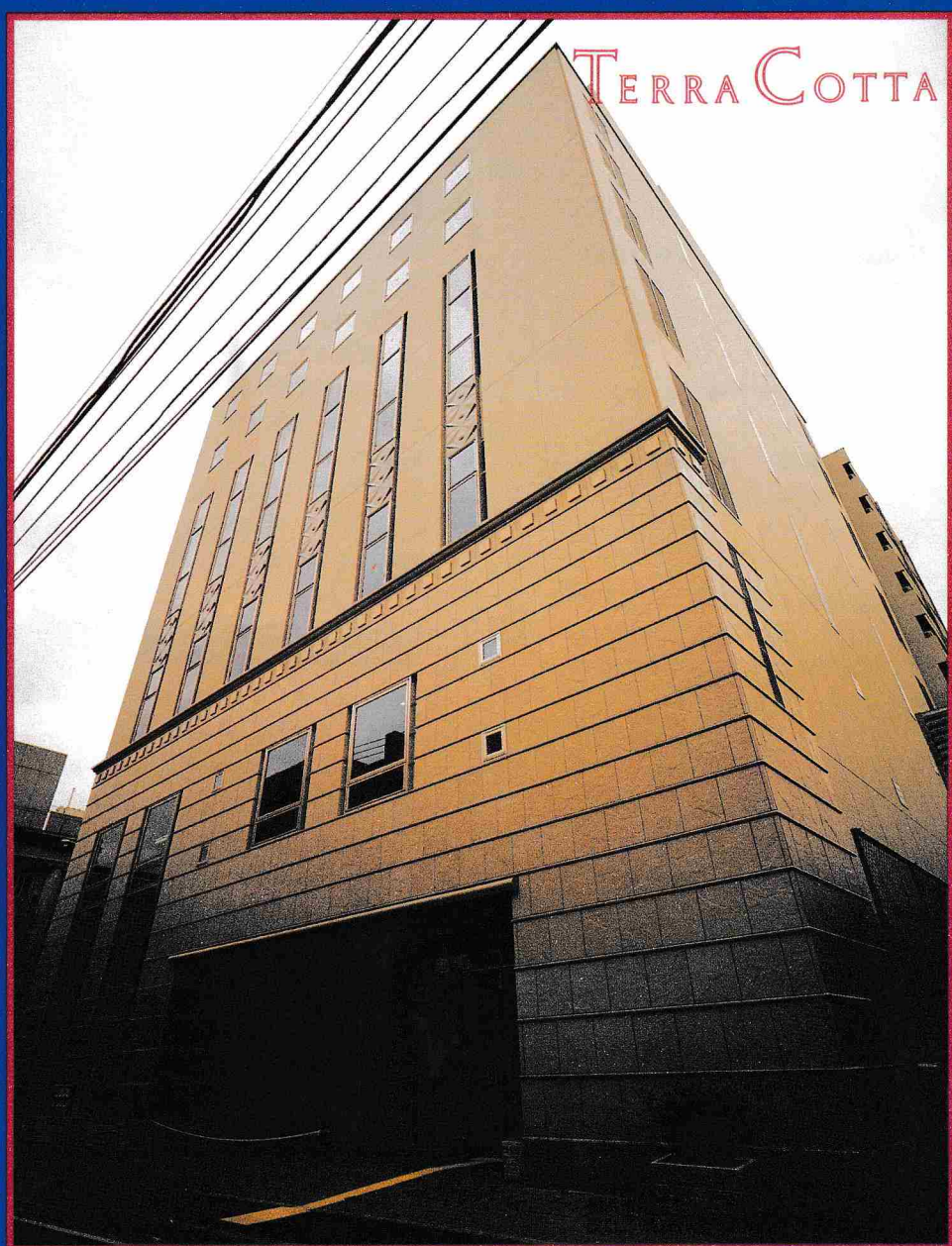
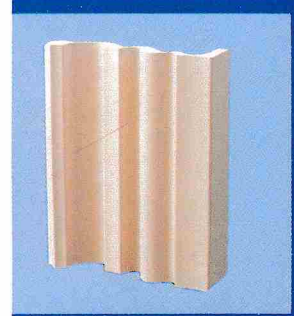
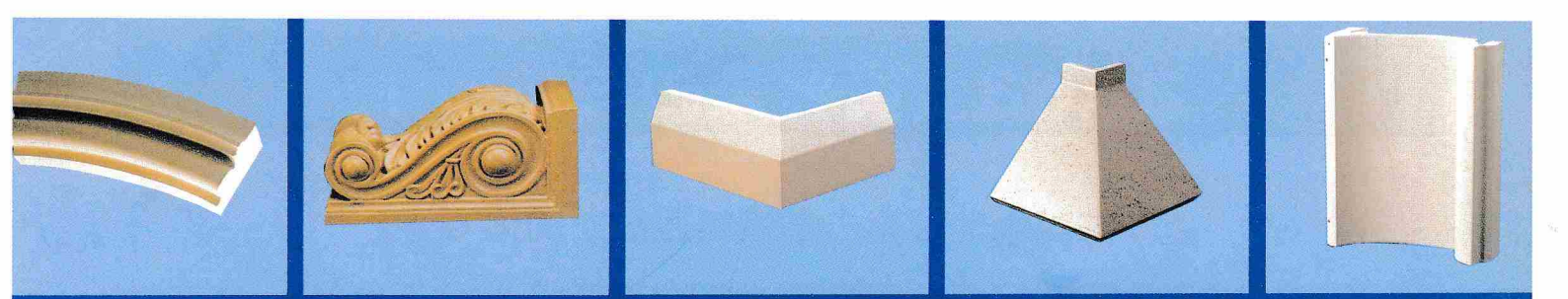
## 情報・広報活動

国内はもとより、広く海外との交流を図り、建築・美術・工芸などにかかわる情報を収集、分析しています。また、会員である建築家・美術家・工芸家の方々の作品、業績、経歴などをライブラリー化し、一般のみなさまに広く活用していただける体制づくりを整えています。

## 保存・調査活動

日本の各地には世界に誇るべき豊かな環境があります。しかし、激しい開発の波に洗われ、崩れ去ろうとしています。日本の優れた芸術的環境を次代に伝えるために、「文化のための1%システム法」の制定運動をはじめ、さまざまな保存活動を進めています。また、調査面においても同法制定に関しての実態追跡調査、歴史的環境・建造物の保存および再生のための調査研究、パブリックアートに関する研究などを地道ながらも着実に続けています。





旧建築の復元に、他部材との組み合わせによる新しい建築表現の実現に、数々の実績を重ねている大塚オーミ陶業のテラコッタ。私たちの開発した新世代のテラコッタは、現代の建築基準をクリアした高品位の物性と高層建築にも対応できる高度な施工法とを兼ね備えています。

【大塚オーミ陶業のテラコッタの主な特長】 ①専門製造ラインから生み出される高品位テラコッタ ②高層外壁での使用も可能 ③旧ビルのテラコッタの再創造から新しいデザインのテラコッタまで。建築家のさまざまな要望に対応 ④実績に裏付けられた施工法を完備 ⑤デザイン協力から図面作製・施工まで幅広く対応

# テラコッタ



大型陶板  
大塚オーミ陶業  
●OTセラミック●テラコッタ●美術陶板

東京・千代田 豊島区千代田区神田両区P.O. TEL: 03-5266-1851 FAX: 03-5291-3338  
〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 TEL: 03-5266-1851 FAX: 03-5291-3338